

ハンドリング トヤリング 後記

和田 則彦

近頃のプレーヤ全般のハウリング・マージンの向上には先ず驚かされた。

テクニクス60A+70Aでプリのボリュームを導入無音溝の間にフルに上げて見ても、ハウリングが発生したのは僅か数機種に過ぎなかったのである。

「ハウリングが起きるのが高級コンボ」という一昔前の評論家的(?)常識は完全に覆えされつつあるのだ!

勿論そのことは、写真にも見られるような、ブロックなどによる十二分の実際使用空間に於ける対策があったの話で、それを等閑にしてプレーヤのハウリングをうんぬんするのは愚かしい錯誤であることはいまでもない。

インシュレーション・マットの「平面保持能力」の重要性について気がついたのは貴重な体験だった。

同じテスト・レコードが、マットによって完全に平らになったり凸凹に波打ったりするのである!それによって聴感上のワウ/フラも増減するし、何よりもサブソニック・フィルターのお世話になるかならぬか…といった「大地震」サントラ盤の15Hz 基音など大影響が出る音溝がいろいろと実在するだけに、バカにならない重大関心事だ。

マットの問題だけではないと思うのだが、プレーヤのワウ/フラに関するスペックはデッキのそれに比べて同価格帯なら遙かに高いが、聴感上その割ではなく、大体プレーヤの数字を2~3倍したデッキと同等に感じられるのは如何なるパラメーターに起因しているのか興味深い事実である(ヤブヘビでレコード製盤

技術の方へ尻を持ち込まれることにもなり兼ねぬが…)

テストに使用したテクニクス205C II Lの素晴らしさは印象的だったが、それを表現するのに「文学的形容詞」をここで連ねるのは適当ではあるまい。

それは啓蒙的評論に委せておくとして、要するにマスター・テープに酷似した再生音をもたらし、又各プレーヤの僅差に敏感に即応し、描き分ける高解像力とハイ・コンパチビリティに、舌を巻いたということである。

人間工学的な見地からのプレーヤの良否は、オーナーの「馴れ」の問題もあり、必ずしも「チョイ使い」だけでは律し切れないところもある。個人的な好みからピックアップすると、価格の安い方のHi-CP物としてはローディー PS-38に食指が動く。

中ほどでは、吸盤状インシュレーション・マットが効果を挙げており、視覚的にもユニークなデザインのソニー PS-3750が気に入った。

上の方では、(筆者の生活には余りオートの入り込む余地がないので)TT-101の技術が生きているのを感じさせるビクター JL-B61Rに魅力を感じる。

全体的に見るとマイクロ DD-5が専門メーカーの年輪の重味を感じさせる信頼性とシンプルな使い勝手の良さで光る。

行方 洋一

プレーヤ・システムの試聴、聴く前の私の気持はそれ程までに音質の上では変りはないのでは、と考えていた。いずれもメーカー製のことだし、ましてやお値段も近いし、ということだから……。

しかし、実際の試聴になってからは音がかなりのいきおいで異って聴えたのにはおどろいた。少々ピッチが低くめに聴えるもの、超低域が少

々だらさがりのもの、同じカートリッジがこうまで異なって聴えるのかと、うたがった程だ。

今回の試聴は私のわがままで私の録音のものが少々多くなってしまったがチェックポイントとしては“雨にぬれても”のシンバル、そしてウッドベース、館野泉の“耳なし芳一”のピアノそして“ベンハー組曲”のグランカッサの音等をメインに聴いてみた。ピアノではワウやフラッタを特に耳をすまして聴いた。

もう1つおどろいた事にゴムシートによりレコードソリみたいなものが出てきたことだ。先のシステムではソリが無かったのにとつぜんソリが出てきたりするシステムがあったのはおどろいた。付属のカートリッジをも含め試聴を行っても良い感じもしたが今回はカートリッジを統一しての試聴にとどまった。

今回聴いた中で特に印象に残ったものをここに記しておきます。

マイクロ DD-5

コストも考えると良く作られたシステムに感じられた。シンプルなものでそれでいて使いやすさ等も含め素晴しかった。今日の試聴機種中のピカールであった。

DP-790・デンオン

放送局にある風のデザインとアームの素晴らしさが気に入ったシステムである。しいていえばストロボ・スコープをもう1つ考えてもらえばもっと良いのではとも感じたシステムである。

オットー・TP-1200

ラックス・PT-131

値段の異なる両システムをえらんだが後者は独特のデザインとユニークなストロボが素敵だったし、ハウリングマージンの点で素晴らしいの一語につきる点が印象的だった。前者の方は良く考えられた製品で色々な点で良く作り上げた商品であった。コストの点でも、これならもんくは無いであろう。